

留学先国名 : アメリカ合衆国

留学先学校名 : カリフォルニア州立大学サンディエゴ校

留学期間 : 平成 25 年 9 月 ~ 平成 26 年 5 月

一年間の留学を振り返って、学業の面では言語学を履修していたので、様々な言語・文化的背景を持つ学生や教授のいる環境で学ぶことができ、授業外でも様々な文化に触れることができ、充実した一年を過ごすことができました。その時々で感じたことを当時のことを思い出しながら順に振り返りたいと思います。

授業が始まって少し経った頃には、課題の量も多く忙しい日々を過ごしていました。留学生は当然のこと、現地の学生も他言語・文化への興味があり、授業においても、言語・文化に関する知識の豊富な学生が多いように感じました。私は日本語と英語以外の言語・文化への知識が浅いので、周囲の人々に刺激され、自分が今までに学んだことのない言語・文化への学習意欲が高まり、様々な言語の会話学習のためのグループに積極的に参加しました。

一学期の終わりごろにお互いの言語を教えあうパートナーが何人かでき、いつも予想外の質問をしてくれるので、教える側としてはとても勉強になっていました。発音の概念が根本から違うので、音のわずかな長さや発音の強弱で音が変わってしまう言語の話者からすると私の日本語はあいまいに聞こえるようで、日本語の発音体系が簡潔で基本的な音できていると思いついていた私にとっては新たな発見でした。また、よく似た2つの語の意味の違いを何度か聞かれて、同じような意味の語がどんなニュアンスの違いを持つのか、うまく説明することが難しく、興味深い点でもありました。そのような活動で、もしくは言語学習のグループで気づいたことは、英語を学ぼうとして英語の会話グループに行くよりも、日本語の会話グループで日本語を英語で教えるほうが自分にとっても発見があり、結局伝えるのはこちらなので自分の英語力の向上にもつながり、何よりも教える自分にとって楽しいということでした。何かを得るためには、自分が与えることを考えたほうが結局自分のためにもなるように思いました。私にできることは母国語の日本語を教えることくらいでしたが、それでも必要としてくれる人がいるのはとても嬉しく心強いものでした。また、日本語をネイティブとしていて、日本の文化で長らく育ったことが当たり前であまり価値のないことのように思っていたのですが、それを生かして特定の人を助けることができることに気づきました。

二学期の講義では、漫画は視覚的言語によって構成されている、など、新たな切り口で授業が展開されているので大変興味深く、新たな視点で言語に向き合うことができました。絵やイラストなどの言葉とは程遠いところにあると思われがちなもの、言語と深くかかわっているという考え方は非常に興味深く思いました。授業では、授業時間の半分以上が学生からの意見・質問とそれに関するディスカッションで成り立っ

ていて、とても活気がありました。教えられた定義や理論をそのまま鵜呑みにせずに、常に反例や矛盾・反論を探しているといった様子で、学生の反論・質問に教授が首をかしげながら「それはとてもいい質問ですね。私はわかりません。」とためらいなく答える、というやり取りがとても頻繁に起こっていて、新鮮でした。議論には無駄な点も多いかもしれませんが、批判的に物事を見ることで常に意見を発信する前提で学習に取り組んでいるのだと感じました。

ある講義を受講していた学生のほとんどが4カ国語から6カ国語を話す、もしくは勉強中という状況で、「二言語話す人はバイリンガル、一言語しか話せない人はアメリカ人」などという有名なジョークの固定概念を覆す他言語環境に驚きました。言語学の授業であること、多言語コースであることもあって特殊な環境であるとは自覚していましたが、カリフォルニアやいくつかの州に限って存在する環境だとは思いましたが、日本ではこのような環境はあまりないと思いました。アメリカ全土での英語の公用語化がいまだに実現していないことから、州によってはその他の言語を母語とする多くの人々が共存していることは事実であり、地域によって大きく違いはあるようでしたが、多文化を擁するこの場所特有の現象は多く存在すると思いました。

講義において興味深いと思った点は、アジア系の文化においては多くの人が理解していると思われることについてはあえて言う事なく沈黙を守る方が好まれるという点でした。ここでは沈黙が嫌われることが多く、沈黙を埋めるために次々と質問する必要性を感じましたし、多くの人が既に知っているような当たり前の事でも言葉にしているような印象を受けました。恐らく日本のような多くの人が言語・知識・文化を共有しているとされる場所ではそのような前提が多くあるため、あえて言う必要もないのかもしれませんが、こちらではそうではないのかもしれませんが。一生アメリカ国内に滞在している人ばかりではなく、家庭環境も異なることが多いので、物事を大前提から説明し始める必要があるのかもしれないと感じました。相槌を打つことは比較的少なかったのですが、日常会話でも、相手の発言には相槌や同意・同調することよりもそれに対して自分の意見を述べるのが好まれるように思いました。同意していることを示すのにも、たとえ少し冗長になっても常に自分の言葉でそれを言い直すようにしているように見受けられました。

異文化体験という観点においては、簡単な日常の挨拶や口癖などからも違いを感じることは多々ありました。インド人の友達から、ありがとう、ごめん、を言いすぎていると距離を感じるから、あまり言わないでほしい、と言われ、インドでは家族や親しい友達には感謝、謝罪の言葉や挨拶などはせず、何かしてもらったことを当たり前のように思っていて、それが自然であり、特別な親しみ、アプナパンを感じるのだ、と教えてくれました。日本人の「親しき仲にも礼儀あり」という言葉にあるような精神とは全く異なる概念でしたが、それは納得のいくものでした。アプナパンという言葉は、以前私が彼に「英語に訳すことができない、もしくは英語では言い表しにくい母国の言葉や概念はあるか」という問いに対して答えてくれたものの一つでした。そのような文化に固有の概念を表す言葉を学ぶことは留学中の楽しみの一つでした。

留学中、他文化について授業で習った事を周囲の人に聞くことですぐに確かめることができたのは大変意

味のある経験だったと感じます。インドでは英語と母語であるヒンディー語の使い分けが行われていること、英語はコンピュータや IT 用語などに使用され、母語は伝統的文化や概念を表すことにそれぞれ使用されているので、その逆、つまり英語で文化について話すこと、母語で IT 関係の会話をするのは極めて困難であるということが事例に挙がっていたので、その点について友人に実際のところはどうかを尋ねたところ、IT 関連の言葉は日本語のカタカナ語のように母語に吸収されることも母語の辞書に掲載されることもなく英語のまま使用されるので厳密に言えば他言語を使用していることになる、とのことでした。他にも多くの言葉が英語のまま母語とともに使用されており、今やほとんど正確な、純粋なヒンディー語を話すことのできる者はいない（おそらく特に都会のほうでは少なくなっているのだと思いました）ようで、日本においても、外来語なしで話をするのはそれなりに難しく、日本語のカタカナ語にもある程度同じことが言えるかもしれませんが、それらを母語としてではなく他言語として使用している点は心理的にもそれらの言葉の使用には大きな違いがあるのではないかと思います。

様々な文化的背景を抱えるコミュニティの中で特に興味を持ったのがアジア系のアメリカ人のアイデンティティについての問題でした。彼らの多くが、出身地について香港、フィリピンなどと答えずにサンフランシスコやサンディエゴ、と答えることが多く、彼らのアイデンティティには両親の出身地や遺伝的なものよりも、生まれ育った環境のほうが圧倒的に大きな割合を占めているようでした。彼らの言語能力のうちどちらが優位かなども影響しているように思いました。彼らは自身のことを日本人であるのと同時にアメリカ人だと認識しているのにも関わらず、日本人は彼らのことを日本人だとは思わずアメリカ人は彼らのことをアメリカ人だとは思っていないと、残念そうに思いを明かしてくれたことは今でも印象に残っています。アメリカ国内の出身だと答えても「元の」出身地、あるいは両親の出身地をしつこく聞かれたり、日本人に避けられたりすることで、どちらにも属していないような気がするとの事でした。

人種によるステレオタイプはやはりあるようで、見た目とアイデンティティを切り離して考えることは、本人がそうありたいと願っても、他者からすると難しいようでした。黒人が白人のようにふるまう、あるいは黄色人種が白人のようにふるまうこと、あるいはそれらの逆の現象にはそれぞれ名前があり、一般的にあまりいい印象を与えるものではないようでした。私も外見がアジア系だと、どうしても彼らのルーツを知りたいと思ってしまいました。それは彼らの育った家庭環境が彼らの生活やアイデンティティに影響すると考えたからでしたが、自然に会話の中で彼らの家庭環境についての言及がないかぎり聞かないほうがよいのかもしれないと思うようになりました。アジア系アメリカ人が多くいるキャンパス内でも、いまだに彼らはそういった質問を何度もされることで「よそ者」扱いされているように感じ気分を害しているようでした。アジア人がキャンパス内に多いせいか、差別されているように感じたことはなかったのですが、根底にはアジア系アメリカ人はアメリカ人ではない、という思い込みがまだ根深いように思いました。

言語と文化、アイデンティティ、人種、様々な要素が絡み合う複雑なコミュニティの中で、その中でも特に言語と文化、言語習得、言語とアイデンティティについての考察を深めることができたと感じます。言語とアイデンティティの複雑性は個々人の中にも、コミュニティ内でも存在し、言語教育や言語の習得、言語使

用においても大きく影響すると感じました。専攻の学習をする上で、生活の中でも学習内容につながるが多々あり、大変有意義な時間を過ごすことができました。カリフォルニアでの勉学・生活を支援して下さったおおさかグローバル奨学金の実行委員会の方々に心から感謝申し上げます。